



Title	監修者序
Author(s)	津曲, 敏郎
Citation	ツングース言語文化論集, 58, 1-2 佐藤チヨ演唱; 池上二良採録・解説; 山田祥子編訳; E.ビビコワ露訳; 津曲敏郎監修・序, ツングース言語文化論集シーゲーニ物語テキスト: ウイルタ長編英雄物語ニグマー = « »: 北海道大学文学研究科, 2014, 258p, (ツングース言語文化論集 = , 58).
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56212
Type	report
File Information	11tsumagari_ja.pdf



[Instructions for use](#)

監修者序

本書はウイльтаの伝統的な長編英雄物語ニグマー (niŋmaa) の一篇「シーグーニ (siiguuni) 物語」のテキストである。池上二良先生 (北海道大学名誉教授、1920-2011) が 1977 年に、ウイльта語の話者佐藤チヨさん (ウイльта名 Napka, 1910?-1985) から採集した録音資料と、先生が残されたノートをもとに、ウイльта語原文のローマ字音韻表記と和訳、およびウイльта民族の読者の便宜を考えてロシア字による原文表記とロシア語訳を合わせ、さらに音声 CD を付したものである。池上先生はウイльта語研究のパイオニアとして、音韻分析から文法記述、口頭文芸のテキスト作成、辞書の刊行、さらには現地初等教育用の教科書編集まで、ウイльта語のおよそあらゆる面に渡って先駆的かつ精密な仕事をされた。研究には完璧を期す先生ご自身としては、おそらくまだ多くのやり残しを感じていらしたかもしれないが、なかでもニグマーのテキスト化は「悲願」であったと言ってもいいだろう。先生のニグマーに寄せる思いは、本書巻末に再録した文章からも読み取ることができる。

ニグマーは、アイヌのユーカラにも匹敵する長大かつ壮大なストーリー展開を有する英雄物語で、「ウイльта口頭文芸中最たるもの」(本書再録の池上解説) と言えるが、それだけに全体のテキスト化は試みられないままに、もはや語れる人はおろか、聞いて多少ともわかる人を見つけるのもむずかしい状況を迎えている。わずかでもウイльта語の母語話者がいる今この時を逃せば、民族の一大叙事詩が (録音資料は残るにしても) 永遠に解析されないまま、闇に葬られることにもなりかねない。

先生の果たせなかった思いを受け継ぐにはあまりに非力ではあるが、いつかニグマーを刊行することが、不肖の弟子に託された宿題の一つのように感じていた。1977 年のニグマー採録 (先生にとっては 1957 年に一部を録音して以来の「再録」でもあった) の旅に誘っていただいたのも、ひょっとしてご自分の代では形にできないことを予感されていたからかもしれない。池上先生をしても、それほどにニグマーの壁は高く、困難であったが、演唱者の佐藤チヨさん自身の説明を得ながら、85 年にチヨさんが亡くなる直前まで、地道に表記・解析の作業を継続されていたようである。

先生から、ニグマーを断片的ながらも表記したノートをお預かりしたのは 2006 年ごろではなかったかと思う。2 冊のノートのうち、1 冊はニグマーの冒頭から途中 (本書の通し番号で 290 行目) までがきれいにローマ字表記されてあった。もう 1 冊は調査のフィールドノートというべきもので、さまざまなメモ書きの後に、ニグマー本文が途中 (53 行目あたり?) から最後まで走り書きされていた (以上、図 1, 2 参照)。おそらく後者のような形から推敲を加えて清書したのが前者であろう。いずれもウイльта語原文のみで、断片的な注記はあるが訳は付いてない (清書版のほうに行あけが施してあるのは、あとで訳を書き加えるためだったと推測される)。しかし、ここまで済んでいるなら、あとは話者の協力さえ得られれば何とかなのではないかと思った。おそらく先生も、あとは頼んだ、というつもりで不完全な形でも託してくださったのだろう。実際、これがなければ (録音資料

だけでは)、ニグマーの復元はさらに困難をきわめたか、そもそも着手するきっかけを失っていたに違いない。

幸い、2006年度から大学院でウイльта語を専攻することとなった山田祥子さん（現在、北海道立北方民族博物館学芸員）が、先生のノートと録音から原文テキストの作成にあたってくれた。また、先生が念願のサハリン訪問を果たした1990年以来、親交のあったウイльта語話者エレナ・ビビコワさんの協力を得ることもできた。以後の経緯については、本書刊行の原動力となっていたいただいたお二人の序文を参照されたい。困難な仕事を成し遂げてくださったお二人に感謝したい。本書の表紙デザインには、ビビコワさんの娘さんであるヴェロニカ・オシポワさんによる、魚皮を材料にした作品を使用することができた。ウイльтаの伝統工芸が次世代に引き継がれていることを喜ばしく思うとともに、本書が民族文化と言語の伝承に資することを願うものである。また、序文等のロシア語への翻訳ではジャルキンキジ・ジャイナさん（北海道大学大学院）の助力を得たことにも謝意を表す。

池上先生のご存命中に形にできなかつたのは残念であるが、ともあれこうしてウイльта民族の誇るべき記憶を一書にとどめることができたことを、ウイльтаの人々とともに喜びたいと思う。

2014年3月

津曲 敏郎